

圧迫止血解除時の剥離剤使用効果

3-6病棟 秋山 和乃
皮膚・排泄ケア認定看護師 岡 志津香

I. はじめに

心臓カテーテル検査、PCI、EPS、アブレーションで圧迫止血のためエラテックスが使用される。圧迫止血解除時に剥離剤の使用を勧めた取り組みと、剥離剤の効果を報告する。

II. 使用製品の機能と注意点

エラテックス、Aベンジン、剥離剤。

III. 言葉の定義

皮膚障害について。

IV. 剥離剤使用の経過

スタッフに剥離剤について情報を浸透させていくが、患者に購入を勧めるまで至らなかった。患者説明用紙を作成、使用開始。購入希望する患者に剥離剤を使用できるようになった。

V. ベンジンと剥離剤使用状況及び皮膚障害の結果

1. 調査期間 H24.3月～12月
2. 剥離剤+ベンジン使用件数 124件
3. ベンジン使用件数 84件
4. 皮膚障害を起こした件数 12件/発赤 4件、皮膚剥離 5件、水疱形成 3件(WOCに依頼 4件)
5. 剥離剤使用した件数 40件
6. 皮膚障害を起こした件数 0件

VI. 治療を受けた患者の動向

86.5%が60歳以上の心疾患、生活習慣病がある高齢者。6月に剥離剤購入について説明されるようになったが、カテーテル治療の経験がある患者は購入しない傾向。

VII. 剥離剤とした上でのアンケート結果

- 1) 剥離剤になって
よかった (17), わからない (3), よくない (0)
- 2) 今後も剥離剤を使用したい
はい (20), いいえ (0)

VIII. 考 察

剥離剤使用では皮膚障害を起こすことはなかった。医療用テープの剥離が使用目的のため、きれいに剥がせることから看護師の支持は高い。ベンジンは人体付着時の悪影響が強く、使用には問題があった。治療対象の多くは60歳以上の高齢者で、既往からも皮膚障害を起こしやすく治癒しにくい状態にある。皮膚障害ができないように勤めていくことは重要なことだった。以前治療経験がある場合、剥離剤を購入しない傾向にあるが、購入の説明をして承諾が得られなかった場合はベンジンの使用を続けている。今回の結果を考えると、全例に剥離剤使用したいと考える。難点としては剥離剤の価格についてである。形状や量について種類の検討が必要ではないか。

IX. おわりに

剥離剤使用の必要性が全患者に説明できるまでに定着した。高価であるから購入しない、以前皮膚障害がなかったから使用しないという考え方ではなく、剥離剤の効果があるからこそ購入して使っていけるように取り組んでいきたい。

引用・参考文献

1. 内藤亜由美（編）：病態・処置別スキンケアガイド，東京；学習研究社，2008
2. ヤクホン製薬会社ホームページ．[Online]．北海道：ヤクホン製薬株式会社[cited 2013-10-25]

available from URL. <http://www.yakuhan.co.jp/index.htm>

インシデントの再発防止について ～効果的なグループワーク研修を考える～

3-7 病棟 佐藤斗子 吉田 奈々
佐々木 瞳

I. はじめに

近年、医療安全に対する関心は高く、医療安全対策としてのインシデントレポートは医療界で定着しつつある。当病棟でもインシデントレポートによる情報提供をしているが、インシデントの件数が減少しないのが現状である。そこで今回グループワーク研修に取り組み、その結果研修が効果的であったためここに報告する。

II. 研究目的

1. インシデントの再発防止には、グループワーク研修が必要であることを検証する。
2. 今後に生かせるような効果的なグループワーク研修を考える。

III. 研究方法

1. 期間 平成24年11月～平成25年3月
2. 対象者 3-7病棟看護師17名
3. 研究デザイン
 - 1) アンケートによる自記式質問紙調査の実施
 - 2) グループワークは討議形式で、事前にSHELL分析を行なった
 - 3) 倫理的配慮
事例は、患者の背景を架空設定とした

IV. 研究結果

アンケートの回収率は100%であった。まず、SHELL分析の実施については、できた11名(65%)、できなかった2名(12%)、どちらでもない4名(23%)であった。回答の中では、「グループワークで気づくことができた」「実際に行っ

て難しかった」という意見があった。SHELL分析の必要性については、15名(88%)の人が必要であったと回答している。グループワークは効果的であったと思うかという質問については、17名全員が思うと回答している。その理由には、「違う視点で考えることができた」「口に出して考えが共有でき安心がもてた」という意見があった。事例については、実際の事例を検討したため考えやすかったという意見があった反面、実際の事例のため当事者がひどく反省してしまうのではないかという意見があった。研修1ヶ月後の自己の変化については、「意識が高まった」「対応時に勉強会のことが思い出された」という意見があった。

V. 考 察

インシデント再発防止に向けて、グループワーク研修を行ない、アンケート調査による研修の効果と効果的な研修のあり方を検討した。

まず、アンケート結果より、全員がグループワークは効果的であったと回答している。その理由として、違う視点での見方の発見や発言することによる共有や安心感と答えている。日常では、時間の制約やナースコール対応などからじっくり話し合う機会が少ないため、研修での意見交換は有意義であったと考える。また今回の事例は、ナースコールが関与しており、実際の具体的な行動も一つの視点であった。研修では、業務の中で、それぞれの役割を担いながらお互いナースコールを意識していこうという結論に達し、研修後ナースコール対応が早くなったように思われた。個々のみならず全体での意識の変容がインシデント再発防止には必要である。